

民族舞踊文化



No.8

1995年8月1日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL03-3583-3633(代)
FAX03-3583-3670



文化庁遠山敦子長官の御出席を頂いて 吉祥七草の宴

遠山文化庁長官よりいただいた ごあいさつ 『七草の宴』

あけましておめでとうございます。

またこの新春の祝いの会にお招きをいただき、本当にありがとうございます。

長年お招きをうけながらついぞ伺う機会がなかったのですが、今日はたまたま公務がありました合間をぬって、一寸黛さんのお顔を拝見しようと思ってかけつけて参りました。したがってこういう場でお話しするという用意も全くないわけで、恐縮しております。

私が初めて黛さんにお会いしたのは6年程前、ちょうど文化部長のときだと思います。それ以来いろいろな形で縁が続いて居ります。なにしろ私が黛さんに感心したことがいくつもあるわけでございますが、一つの言葉で申し上げるといたしますと、『一生懸命』という言葉が一番ふさわしい方ではないかと思います。黛さんはすぐれた踊りを通じて人々の心を暖かにし、またその交流を通じて他国の人達とも、ゆるやかに交流の輪を深めながら、理解あい、協力しあっていくという精神をもって生きぬいていらっしゃる、そういう方であろうかと思ひます。また一生懸命でありますので、よく『好きこそ物の上手なれ』と申しますけれどもまさにそういうことを体現していらっしゃる方であろうと思ひます。それに単に踊るということではなく、つねにその意味を考えながら、深く深くつきつめて行動に移しておられるということに私は心から尊敬申し上げているわけでございます。

文化庁長官

遠山 敦子

今年春から一寸腰の方がーという言葉でございまして、どうぞよいお年になります様に。そして私どもも出来るだけ、少くとも精神的にしかかなか応援が出来ないわけではございますが、おおいに応援をしたいと思ひますので活躍下さいます様期待しております。又財団が健やかに育っていただき、よい活動をしていただくということが、日本の文化の意味を他国にもしらしめる、非常によいことだと思ひて居ります。ということで、御参会の皆様方のお幸せと御健康をお祈りしますと共に、黛さんの益々の御発展をお祈り申し上げます。何か突然でございまして十分なお話しも出来ませず失礼いたしました。

猪年は荒れる年

心して迎え まもろう

そして耐えよう・この年こそ

会場風景



中田乙一氏のごあいさつ

財団をまもり育ててくださる理事の一人 三菱地所㈱取締役相談役



紅白の七草粥を召し



乾杯

日本芸術文化振興会 理事長 加戸守行氏

平成七乙亥年ごあいさつ

理事長 黛 節子



上がる来客

(手づくりの七草をそえて)



中国雲南少数民族との友好交流事業—劉金吾常務副主席招請日記

講演会「雲南省少数民族の稲作文化と舞踊」

劉金吾女史の来日と講演会の開催

当財団と中国舞踊家協会雲南省支部との民族舞踊についての交流事業の一環として、去る1月18日から25日まで、劉金吾女史（雲南省舞踊家協会常務副主席）を日本へお招きし、雲南省少数民族の稲作文化と舞踊に関する同女史の講演会を四回にわたって開催しました。この開催にあたっての共同開催団体（機関）、即ち東京都立大学中国民話の会（1月21日）、埼玉県立民俗文化センター（1月22日）、玉川大学芸術学部（1月23日）及び東京国立文化財研究所芸能部（1月24日）の各関係者の皆様から大変お世話になりました。以下それぞれの講演会の様子をスナップ写真とあわせて御紹介します。会場で紹介された雲南省少数民族の舞踊（芸能）についての聴衆の反応は、どちらかといえば珍しきの方が先にたっていたようでしたが、日本のものと比べながら、両者の共通点や違いは何なのかについて熱心に考えていました。

なお劉女史の今回の来日に際し、日本民族の稲作舞踊の田楽踊が丁度1月20日の「毛越寺の延年」に行われていましたので、同女史に岩手県の平泉町まで出向いていただき、雪の降りしき中、現地の祭りを直接に体験していただきました。同女史はわずか一週間の滞在で、ハードな講演スケジュールにもかかわらず精力的に日程をこなしていただき所期の目的を達成させていただきました。心よりお礼申し上げます。



劉副主席と黨理事長



毛越寺・藤里住職と劉副主席

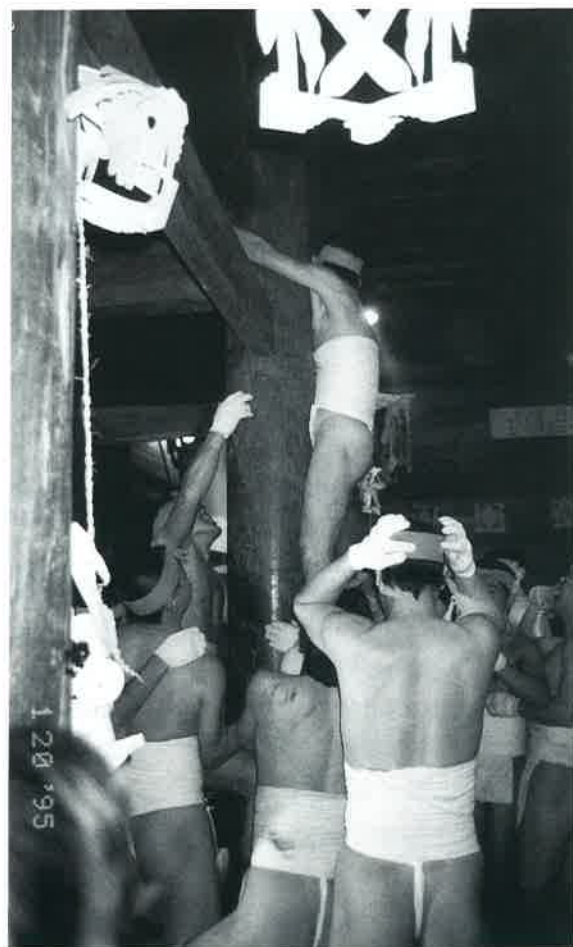
岩手県毛越寺 延年の舞 1月20日

巫女舞は当財団の研究課題でもあるが、この中に若女と称ばれる巫女舞がある。此の舞は一名坂東舞とよばれ、鈴（手持道具）一個のみで舞う。老いたる禰宜が、若返ってゆくというシンプルで精神的に深い舞いである。



若女

毛越寺の1月20日 二十日夜祭には延年の舞・田楽が奉納される。



町でもようされる男子のやく落しの清めの二十日夜祭のはだかまつりが常行堂になだれこむ様。



常行堂内には須弥壇の後に掛けて注連縄がめぐられ、これに雑華とも飾花とも呼ばれる菊、桐、茗荷、大根、蕪菁、扇、鳥居などを半紙に切り抜いたものが下げられる。

東京都立大学中国民話の会での講演 1月21日

星野 紘

文化庁伝統文化課
主任文化財調査官

(以下の1月21日、22日、
24日の3講演の報告)



ハニ族の婦基吐の一場面

(男と女の人形を手にした二人が抱擁しあっています)

お昼頃、東北新幹線にて岩手県から東京に舞いもどった劉女史は、休む間もなく、八王子市南大沢の東京都立大学へ向い、午後3時から2時間、約20名の聴衆を前に講演を行いました。参加者はいずれも中国民話の会会員の研究者で、中国少数民族の伝承についての精通者ばかりであることから、熱心に話に聴き入っていました。話の内容は、「雲南省少数民族の舞踊の概要」「ナシ族のトンバ舞」「ハニ族の婦基吐」の三点についてで、ビデオ記録の映写も行われました。

三番目の婦基吐とはハニ語を漢字の音を借りて表記したもので、グイジトウと発音され、雲南省元江県浦貴村のハニ族が九年に一度行う大祭（三月頃行われます）のことであります。男女が平気で抱擁しあったり、男女二体の人形を重ねあわせてみたりの所作を見せる場面があり（写真参照）、子孫繁殖の願いを表現しているとのことでした。ほかに歌垣的な男女の掛け合い歌があり、棕櫚の葉の扇を手にしたの踊もあります。さらに田遊び的な農作物の耕作作業の模倣的演技もあるなど、民族の村立ての神話を種々の芸能をもって表現しているもののようでした。

埼玉県立民俗文化センターでの講演 1月22日

この講演は、標記民俗文化センター（埼玉県岩槻市）が、埼玉県民に外国文化への関心を高め、国際交流の意識を醸成してもらうため特別に開催して下さったもので、当日お昼頃、劉女史が同センターに到着すると吉川国男同センター所長以下関係官が玄関に出迎えてくれ（写真参照—右頁上段）、日中両国の国旗も掲揚されていました。同センターの講座室は約50名の聴衆で満杯となり、ここで劉女史は、ビデオ記録を上映したりしながら、「雲南省少数民族の舞踊の概要」「イ族の虎の踊」「イ族の恋愛から婚姻に至る習俗」の三点について話をしました（写真参照—右頁中段）。このうち虎の踊は、雲南省双柏県法脰郷小麦地冲村のイ族の旧正月に

毎年行われているものです（写真参照—右頁下段の右）。フェルトで耳や尻尾を象り、顔や手足に絵の具でペインティングをして虎に扮した（ネズミみたいな格好ですが）者達が、田遊び風な農耕々作過程の模倣行為そのほかを演じ、またこの一団は村の各家々を訪問して厄払いと招福の呪術をほどこします。また恋愛から婚姻に至る習俗の方は、雲南省牟定県のイ族の伝承で、娘宿にて若い男女が恋歌を掛けあったりの場面がありました。農家のイロリや台所の様子、それにブタやニワトリの鳴き声などが日本の田舎の昔の情況に似ていて聴衆はひきつけられていました。



中国雲南省の少数民族の輪踊り

中国・雲南省の少数民族の「が、二十二日午後一時三十分
舞踊についての特別講演会」から、岩槻市加倉の県立民俗

日本文化のルーツ！ 中国民族舞踊を特別講演

22日、岩槻



文化センター講座室で開かれ
る。講師は雲南省舞踊家協会
副首席・劉金碧（りゅう・じ
ん）さんと、文化庁主任文
化財調査官・星野紘さん。劉
さんは同省の民族舞踊を研究
している女性の舞踊家。
雲南省には約二十五の少数
民族が暮らすとい、今回は
その中から「ナシ族」「イ族」
「ハニ族」を紹介。同省は、
日本文化のルーツと言われる
ほど風俗的に日本と似ている
ところがある。日本のお盆に
あたる「先祖祭り」のときに
精霊を慰めるために踊るとい
う「輪踊り」は、まさに日本
の盆踊りに通じる。このよう
な日本の芸能との類似性、関
係に触れながら、彼らの舞踊
を解説する。
入場無料。問い合わせは、
同センター（☎0488・75
7・8008）へ。

玉川大学芸術学部講演会 1月23日

久しぶりの再会に劉常務副主席はすっかり玉大生になつかしさを感じられ60名の出席者にさっそく中国、雲南省の少数民族、タイ族の有名な「孔雀舞」の講演をなされ、最後は実技のレッスンで会場はすっかり時間延長の盛況のうちに終了いたしました。

岡田先生、法月先生、花柳伊三郎先生にはいろいろお世話になりました。



劉常務副主席・玉大生と共に



中国の農村に伝わる剪纸（タイ族の孔雀舞）

東京国立文化財研究芸能部での講演 1月24日

当日午前中、わずかの空き時間を盗むようにして劉女史は浅草寺を見学したり(写真参照一右)、買い物をされました。その日の午後、上野の東京国立文化財研究所へ出向き、その会議室で、同研究所芸能部の研究員など約15名の専門家を前に講演が行なわれました(写真参照一左)。話の内容は、「雲南省少数民族の舞踊の概要」「ナシ族のトンバ舞」「イ族の打歌」ほかで、やはりビデオ記録の上映もありました。ナシ族のトンバ舞はトンバと称される宗教職能者が行う祭祀舞踊で、内容的には直接稲作に関わるものではありませんが、しかしこれは農民が携わっており、また農民達の伝統的祭祀儀礼の中で執り行われてきたものです。



このトンバ舞は、象形文字を用いた今から約千年ほど昔の古い舞踊譜を保存していますが、現在故実に精通した年輩者が激減しており伝統の技法の

継承が危ぶまれています。それを如何にして継承してゆくべきか、まさに当文化財研究所が任務としている無形の文化財の保存方策について、劉女史と、聴衆との間でかなり突っ込んだ質疑応答がなされました。



浅草にて

黛アート・サロンの夕

能楽界の鬼才、橋岡久馬先生をお迎えしてのトーク・パフォーマンス そのⅡ

黛アート・サロンに橋岡久馬先生（観世流能楽師）をお迎えして、'94年10月31日（月）午後7時より、黛 節子の司会で一〝失敗を語る・能装束の著け方・演説上達法、一について対談実技の組合せによるパフォーマンスを開催しました。

（橋岡先生の巧みなお話に皆様大喜び）

八世 橋岡久馬先生プロフィール

大正12年8月13日生まれ。

芸術院会員故橋岡久太郎先生の子息として、観世流能楽師橋岡家八世藝系を継承。

重要無形文化総合指定保持者

スウェーデン王国演劇最高勲章受章

フランス政府給費演劇部門留学

観世流欧州七ヶ国演能団団長

他、海外公演も数多く行う。

四百年の歴史ある古典演劇、『能』を、正しく守り、後世に伝える人。最も客が呼べるという定評を確立。

能装束の著け方の一部を
ご紹介いたします。



1



2



3



4



5



6

次ページに続く



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

伝統とモダンの出会い、柳宗理先生をお迎えしてのトーク・パフォーマンス そのⅢ

黛アートサロンに柳宗理先生(デザイナー)をお迎えして'94年11月10日(木)午後7時より黛節子の司会で
一民俗のデザイナーと題して、スライドをまじえてのパフォーマンスを開催した。

柳 宗理先生プロフィール

1915年6月29日生まれ。東京美術学校(芸大)洋画科卒。
父、柳宗悦先生の薫陶を受け、造形デザイナーとして、
国際的に活躍する。
国際デザイン展招待出品や、国際デザイン会議の委員
として数多くの国際会議に出席、講演を行う。

財団法人 柳工業デザイン研究会理事長
日本民芸館館長
日本民芸協会会長
金沢美術工芸大学客員教授
沖縄県立芸術大学客員教授
日本高速道路調査会景観委員
1981年紫綬褒章受章

—— 永久保存作品 ——

ニューヨーク近代美術館
ルーブル美術館
メトロポリタン・ミュージアム
アムステルダム、ステドリック・ミュージアム 他



麦踏みの踊り

柳 宗理

30年位前のことだったと思います。メキシコの銀器デザインのコンペ審査の為、メキシコの南部国境に近い町を尋ねた時です。そこは、未だ洋服など着ている人もなく、男も女も美しい民族衣裳を纏ってておりました。そして、ちょうどその町の近くの畑で歌を歌いながら麦芽を踏んでいる女性達の光景に出くわしました。ところが、暫くしてよぼよぼした2人の老人がそこに現われ、その1人が側に生えていた葦の茎を、やおらナイフでチョンと切り取り笛を作り、その笛を吹き始めたのです。その笛の音は山々にこだまして、素晴らしく澄んだ音の響きを醸し出しました。そうすると、麦芽を踏みしめていた女性達は、その笛の音のリズムに合わせて本当に楽しそうに大地を踏みしめながら踊るのです。私はその時、この世の最も純粋な音楽による踊りの動きにすっかり心酔してしまったのです。

人間らしい本当の踊り、本当の音楽は一体何処から来るのだろうか、私は、しみじみ考えざるを得なかったのです。

1995. 6. 30



写真はメキシコの民族



もうっじ 毛越寺の田楽躍

今、私は岩手県の毛越寺に残る延年の舞・田楽躍をときほぐしている。

毎年1月20日、この日、毛越寺では裸祭りとして男性25歳と42歳の厄払いを主とする行事が行われる。そのあとの法楽としてこの延年の舞が奉納される。前から取材をと思いつながら実現できなかったが、漸く時を得て、今年の1月20日、毛越寺を訪れた。

この寺の庭は浄土庭園と名付けられ、中央に池があり、その昔、龍船を浮べたとか、さもありなんと思われる品格がある。といっても池は無表情に氷りついて池をとりまく周囲の道には、雪が深々と積っていた。その池の向こう正面に常行堂とよばれるかやぶきの古い堂がある。日の入りの早い冬、白い雪の上に佇むお堂にともる灯は、人を導く温かさを持っていた。このお堂の扉はすべてあけはなされ、“どうぞ炭はたくさんありますからお使い下さい”と丁寧に言って下さるが、いくら焚いても寒さと冷たさに変りはなかった。

お堂の中央の須彌壇に祀るは五体の御仏、一体は如来、あとの四体は菩薩、その回りには毛越寺の方々の手で作られた軒花が所せましと飾りつけられてあった。その裏側、奥殿には魔多羅神が祀られてあり、まさに神仏混淆の代表であると思った。

遠くから雑声がかきこえてきた。来た!! それは七ツの厄子を背負った人々の群である。大僧正はその人々に何やら唱えながら厄払いをしてあげる。我先きに大僧正の側へと争う人々を見ていると怪我をせねばよいかと、そのほうが心配になるのは私の信仰が浅い故か?

さあ、いよいよ本番、はだかのおにいさん、おじさんたちが酒の勢いをかりて狭い本堂に雪崩れ込み、はりといわず柱といわず登ったり、からみついたりして奇声を発する。それを見ていると人間というより骨の機械人形が動いているような錯覚を起させた。その行がすみ一段落の後、延年の舞は始まった。

最近、この舞の装束を作りかえたとか、あまりに華麗で常行堂の雰囲気とかけはなれた感じがした。しかし、舞の方は昔の舞いぶりが残されてあったのを藤里執事が、つづり作られたとか。私はこれらの舞の中に私の意図とする民俗舞



毛越寺田楽躍

撮影者 萩原秀三郎氏

踊そのものといえる腰の落ち方、自然運動によって起る力強さに胸のすくような共感を覚えた。特に京殿舞の脇と若女の彌宜をやった方には大拍手。それと田楽躍にも。現代では考えもつかぬ構成と振りが醸し出す新鮮な雰囲気には圧倒された。こうした深い感動を胸に最初の毛越寺見学を果したが、それから10ヶ月たった去年の秋、再び毛越寺を訪れ改めて藤里師から丁寧に教わった、特に田楽躍を。足の運び、腰の落し方、間あいに新鮮さが溢れていることを改めて感じ、私の目に狂いのなかったことが子供のように嬉しかった。藤里師は“延年を取材に見えた方は数多いが、特に田楽躍をといわれたのは黛さんだけです”と。そして胴バッチを最初から“私の相手を”といわれてお教えいただいたのには驚いた。藤里師と向かい合い、腰を落してトントンと踊ることはまことに舞踊家として三昧の境地であった——。僅か8人の構成で、あの単純と複雑が入り乱れる田楽躍は、まさに黛好みであり、これは私にとって大きな宿題と思われた。

山高きが故に尊からず。文化もまた現在の感覚のみが新しからず。

足が地についた田楽躍を如何ように舞台化するか、3ヶ月でできるか、3年たってもできないか、作品とはそういうものであり、その興奮に引きずり回されている。

節子

1983年 取材

民族舞踊文化 No. 8

1995年8月1日発行 発行人 黛 節子 編集人 大野 晃

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F Tel 03-3583-3633(代)
Fax 03-3583-3670

財団法人 黛民族舞踊文化財団 特別頒価¥1,500

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO